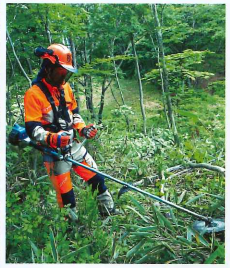


林業でいこう！ FORESTRY! in MIYAGI

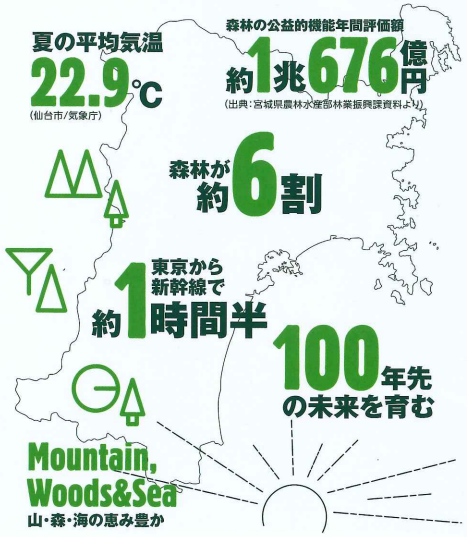
宮城に住む、森で働く、充実した毎日がここにある。

宮城は「ちょうどいい県」

林業の舞台となる山と森、心を洗ってくれる川や海。「杜の都」として知られる仙台に象徴されるように、宮城にはそこかしこに大らかな自然が息づいています。かと思えば、首都圏までは新幹線で約1時間30分と短時間でアクセス可能。利便性に恵まれながら自然と親しむ、居心地のいい暮らしがここにあります。

「うまい」食べもの「うまく」遊べる

豊かな大地が育むお米や野菜、世界三大漁場のひとつに数えられる三陸の海で獲れる新鮮な魚介類。自然に恵まれた宮城は「食材王国」でもあり、おいしい食の数々が、林業で働く人々のパワーの源に。また、キャンプやウィンタースポーツ、スポーツ観戦など、アクティブなひとときを楽しめるスポットも充実しています。



宮城の森には「可能性」しかない

宮城は面積の約6割が森林に覆われ、2/3が民有林です。こうした森は木を伐ったり手入れを必要としていますが、県内の間伐実施面積は年間2,714ha。本来は年間5,600haが理想ですが、その半分にも及びません。しかし裏を返せば、それだけ仕事が豊富にあるということ。宮城の森が、林業の新しいヒーローを待っています。

「林業の時代」は、まだまだこれから

再生可能エネルギーとして、木質バイオマスの利用が推進されるなか、自然にやさしいエネルギーの源となる産業としても、林業は注目を浴びています。また、2011年の津波でもともとの景色が失われた宮城の海岸沿い。100年先の命を守る防災林の再生のためにも、健全な森づくりのプロの力が必要です。

働く 林業マシーン図鑑

斧で木を伐る、かつての「木こり」とまではいかなくとも、林業の現場は「人の手」で作業をするイメージでしょうか。答えはノー。社会全体の流れがそうであるように、林業でも日進月歩で機械化が進んでいます。作業の中心にいるのは人ですが、高性能機械を導入することで作業効率が大幅に向上しているのです。

ハーベスタ[伐倒造材機]
伐倒・枝払い・玉切り・集積作業など多工程を1台でこなす

プロセッサ[造材機]
林道や土場などで、枝払いから集積作業まで一貫して行う

グラップル[木材荷役機械]
爪のような形状で木を掴んで持ち上げ、荷役として活躍

フォワーダ[積載式集材車輌]
玉切りにした木材を荷台に積んで運ぶ集材専用機械

林業ならではのこんな魅力、あんな苦労。最前線の声を訊きました。

森林施業プランナー
杉山 秀行さん
(就業年数／10年)

FORESTRY! in MIYAGI

林業作業士
佐久間 玲さん
(就業年数／2年)

街では得られない感動が、森にはある

もう10年前になります。塾の講師という、林業とはかけ離れた職を辞め、森に生きようと決めたのが39歳。高校時代から山登りをしていて、心のどこかで常に自然を相手にする仕事を求めていました。ところが趣味で登る山と、作業現場とでは勝手が違い、慣れるまでは大変でしたね。特に夏は気温も湿度も高く、蜂に刺されることも。当初は本当に過酷でしたが、それでも続けてこられたのは、苦労に勝る充実感があるからです。自然のなかには、素晴らしい景色があります。感動があります。そして、何よりも林業には達成感があります。今は事務系の業務が中心で、以前ほど現場に入る機会は多くありませんが、作業の確認などで森に入るたび、「やっぱりここは居心地がいいな」と感じますね。

身につけた技術は一生を支えてくれる

林業と聞くと、人里離れた場所で生活するような、田舎暮らしを想像されがちですが、それは誤解。私もそうですが、生活の拠点は都市部にあり、会社勤めの人と同じように、現場に通勤するケースがほとんどだと思います。便利な生活を保ちながら、性に合っている森の仕事を選べることも、私にとっては魅力でした。技術を身につけるまでは大変ですが、身につけてしまえば一生の仕事にできるのが林業。10年前の自分が下した決断は間違っていなかった。そう思いますね。

プロとの差を痛感させられた最初の一ヶ月

お金も、手間もかからないほど子どもが大きくなり、そろそろ宮城に腰を据えて暮らしたい。そう思い、転勤の多かった職を離れ、転職して2年以上が経ちます。やるからには地域に貢献できる仕事がしたいと考え、自ずと目が向かったのが宮城に広がる森でした。もともと林業に興味があったこと、体力にもそこそこ自信があったこと。自分向きの仕事と思っていましたが、甘かったですね。初めて森に入って作業をした一ヶ月、体重が10kgも落ちました。そんな自分を尻目に、先輩の作業員たちは厳しい環境でも着実に仕事を進めていく。「やっぱり林業のプロは違うな」と感じたことをよく覚えています。しかし自分もそうならなければいけない訳で、半分は意地で、技術を磨くことに必死でした。

難しさがあるから、林業という仕事は面白い

私にとっての林業の魅力といえば、身につけるほどに解る技術の奥深さ。例えば木を伐る作業ひとつとっても、伐り方は基本的に同じでも、自分の思い通りに倒れてくれるときもあるし、そうはいかないこともある。難しければ難しいほど、挑戦心が掻き立てられますね。また、現場の作業は太陽が沈んだときが終了の合図。朝は早いけれど、残業もなく終業時間がほぼ一定。どうやらそれが自分の生活リズムに合っているようで、プライベートに時間を充てられるのはありがたいですね。

林業は一日にしてならず。充実感も、達成感も、森を知れば知るほど深く、大きくなっていく。